マタコン島小論（1）

19世紀アフリカ西海岸における
ある小島の使用・所有・領有をめぐる動態

落合　雄彦*

Matacong Island (1):
Questions of Ownership During the Nineteenth Century

Takehiko OCHIAI

The aim of this article is to examine how Matacong, a small island off the coast of the Republic of Guinea, West Africa, was used by merchants, claimed by local chiefs, and colonized by Britain and France in the nineteenth century. In 1825 the paramount chief of Moriah granted the lease of the island to two Sierra Leonean merchants, and in 1826 it was ceded to Britain by a treaty with the chiefs of Sumbuyah and Moriah. Since the island was considered a territory exempt from duty, British and Sierra Leonean merchants used it as an important trading station throughout the nineteenth century. Major exports of Matacong Island included palm kernels, palm oil, hides, ivory, pepper, and groundnuts, originally brought by local traders from the neighboring rivers, and major imports were tobacco, beads, guns, gunpowder, rum, cotton manu-

＊おちあい・たけひこ：龍谷大学法学部助教授　アフリカ政治
Associate Professor of African Politics, Faculty of Law, Ryukoku University.

factures, bar iron, and hardware. In 1853 alone, some 80 vessels, under British, American, and French flags, anchored at the island. By the convention of 1882, Britain recognized Matacong Island as belonging to France. Although the convention was never ratified, it was treated by both countries as binding. The article draws widely on documents of the Matacong Island (West Africa) Papers in Birmingham University Library. The collection, purchased by the library in 1969, consists of 265 documents relating to Matacong, such as letters, agreements, newspaper cuttings, maps, and watercolor pictures.

目次

1. 問題意識
2. ノーザン・リヴァーズ地域概観——19世紀初頭以前
3. マタコン島をめぐる権利の設定とモリア紛争——1802－1826年
4. ナタニエル・アイザックスの交易活動——1844－1854年
〔以上、本号掲載〕
5. 西アフリカ委員会決議とフランスの進出——1865－1867年
6. 領土交換交渉——1866－1876年
7. マタコン島事件——1879年
8. 境界線画定——1881－1889年
9. フランスによるマタコン島占領——1891年
10. むすびに代えて
参考文献
〔以上、次号退職教授記念特集号のため次々号掲載〕

1. 問題意識

現在のギニア共和国の沿岸部にマタコン（Matacong）という名の小さな島がある。日本の学校教育で用いられている程度のアフリカ地図にはまったく載せられていない、いわば大半の日本人にとって「不可視」のこの小島の存在に筆者が気づき、それに関心を抱くようになったのは、1993年のことであった。筆者は当時、イングランド中部にあるバーミンガム大学大学院（西アフリカ研究センター）に留学していたが、あるとき同大学図書館

の蔵書を調べているうちに、西アフリカに関する貴重コレクションが所蔵されていることに気がついた。「マタコン島（西アフリカ）ペーパーズ」（The Matacong Island（West Africa）Papers: 以下MIPと略す）と題されたそのコレクションは、もともと69年12月に同図書館が購入したもので、西アフリカのマタコン島に関する主に19世紀の史料265点から構成されていた。筆者がマタコン島という名称を眼にしたのは、このときが初めてであった。その後、筆者は、MIPに関心を抱きつつもそれを調査するためのまとまった時間をみつけることができず、93年秋には留学を終えて日本に一旦帰国した。そして、翌年１月に改めてバーミンガムを訪れ、同コレクションの調査を実施することとなった。図書館に毎日通い、MIPの史料をひとつひとつ読み、それらをノートに書き写すという骨の折れる作業を重ねていくうちに、当初マタコン島についてまったくの無知であった筆者にも、同島が英仏による19世紀の西アフリカ植民地分割においてかなり重要な「場」を提供していたことが次第に理解されるようになっていった。

本稿は、MIPの史料とその後筆者が折りに触れて収集してきた文献資料をもとに、まだ「西アフリカ」（West Africa）よりも「アフリカ西海岸」（West Coast of Africa）という表現の方がより一般的であった19世紀という時代のマタコン島の歴史とその「場」をめぐる使用・所有・領有の諸動態を解明しようとする試みである。

19世紀のマタコン島に関する記述は、シエラレオネやギニアの一国史あるいは英仏による西アフリカ植民地分割史に関する文献などのなかに散見されるものの、その情報量はかなり限定的である。したがって、本稿が描く19世紀のマタコン島という「場」をめぐる情景は、諸文献のなかに散在する関連記述を拾い集め、そうした断片を結びつけて再構成した、いわば未完成の寄せ集め細工のような産物でしかない。また、史料的制約のために、本稿は、主にイギリスの視点から捉えた、マタコン島に関する「事件史」あるいは「物語史」の域を出るものではない。しかし、マタコン島という個別具体的でミクロな視点を獲得した上で、商人がその「場」をいかに使用し、現地の首長がその所有をいかに主張し、そして、英仏が同島を

いかに植民地化したのかを考察することで、私たちは、19世紀の西アフリカ社会への理解をより一層深めることが可能となるに違いない。そこに、本稿の目的がある。

それでは、19世紀のマタコン島という「場」の考察そのものに入る前に、まずそれまでの時期の「場」を含む「空間」としてのアフリカ西海岸、特に19世紀に英語話者によって「ノーザン・リヴァーズ」（Northern Rivers）と呼称されていた、現在のギニア共和国沿岸部周辺の状況を概観しておくことにしよう。

2. ノーザン・リヴァーズ地域概観
――19世紀初頭以前

（1）ヨーロッパ人商人の進出

19世紀当時、現在のギニア共和国の沿岸部にほぼ相当する、北はヌネズ（Nunez）川から南はムラコリ（Melakori, Mellacourie, Mellacorée, Mélikhouré）川あるいは小スカーシーズ（Little Scarcies）川周辺までの流域（図1の河川番号1～11の間の流域）は、ノーザン・リヴァーズと呼称されていた。これは、1787年にイギリスによって建設されたシエラレオネ入植地を基点とした名称であり、シエラレオネからみて同沿岸部が北部方面（つまり、ノーザン）に位置していたことに由来している。これに対して、フランスのアフリカ西海岸進出の拠点となったセネガルからみれば、同沿岸部は南部方面に位置しており、このために仏語話者は同地域のことを「リヴィエール・デュ・シュド」（Rivières du Sud: 南部河川）と呼んだ。

その名称が示すとおり、ノーザン・リヴァーズ（あるいはリヴィエール・デュ・シュド）を地理的に特徴づけているのは、フータ・ジャロン（Fouta Djallon）高地やその周辺の丘陵地帯（北東部）などから大西洋沿岸（南西部）に向けて並行して幾重にも流れる河川である。15世紀以降、ヨーロッパ人商人が同沿岸部一帯に来航し、アフリカ人との間で交易活動を展開する上

図1　ノーザン・リヴァーズとシエラレオネ

（出所）　Christopher Fyfe, *A History of Sierra Leone,* London: Oxford University Press, 1962 所収の地図を基に筆者作成.

で、こうした河川は、ヨーロッパから持ち込まれた商品（銃、火薬、火酒、タバコ、鉄棒、綿布、金属製品、ビーズなど）を内陸部に運び、逆に内陸部の商品（金、コーラの実、象牙、獣皮、蜜蝋、奴隷など）を沿岸部へと輸送するための重要なルートとなった。

1785年から1787年にかけてシエラレオネに滞在した、イギリス王立海軍のジョン・マシューズ（John Matthews）船長は、当時ノーザン・リヴァーズ周辺で行われていた交易の様子を次のように記録している。

> 冒険者が適切な船荷――この地域でいえば、ヨーロッパとインドの綿布と亜麻布の製品、シルクのハンカチーフ、タフタ（光沢のある堅い平織物）、きめ細かな青と赤の毛織物、緋色生地布、きめ細かで上質な帽子、梳（そ）毛織の縁なし帽子、銃、火薬、弾丸、サーベル、亜鉛棒、鉄棒、白目製盥、銅製のやかんと平鍋、鉄製ポット、様々な金物製品、陶器とガラス器、馬巣織とギルト（若雌豚）皮の鞄、様々なビーズ、金銀の指輪と装飾品、紙、きめ細かで上質のチェックの織物、亜麻布製のシャツと縁なし帽子、イギリスと外国の火酒とタバコ――を積んでこの沿岸部に到着すると、まず彼は適切に荷を積み込んだ複数のボートを異なる川に送り出す。交易の場所に着くと、彼らはただちに集落の長を訪ね、商売をしたい旨を告げ、庇護を求める。集落の長は自分自身が引受人になるか、外国人の荷物や人間の安全と貸与する金額のすべての返済を保障してくれる信頼できる人物を彼の代わりに指名する。こうした手続きが終わり、適切な貢物がなされると（貢物なしではことは何も運ばない）、彼らは商売に取りかかる。彼らには2つの方法があり、現地人に彼らの品物を預けて内陸に運んでもらって売りさばくか、あるいは逆に商売が彼らのもとに来るのを待つ。前者はうまくいけば効率的だが、後者の方が常に最も安全である[1]。

このように、18世紀後半にノーザン・リヴァーズ周辺に来航したヨーロッパ人商人は、しばしばヨーロッパからの船荷をいくつかのカヌーやボート

に分けて積み込み、それらを複数の川に送り出して、川沿いの集落を拠点に交易活動を行っていたのであり、河川は、ヒト、モノ、情報の運搬や伝達のルートとして、また、交易活動の舞台として重要な役割を果たしていたのである。しかし、ノーザン・リヴァーズは、海岸線が複雑に入りくみ、また、マングローブ[2]の林や湿地が沿岸地帯に広がっていたこともあって、ヨーロッパ人にとっては船舶の航行が容易ではなく、そこでの交易は必ずしも魅力的なものではなかった。このため、少なくとも18世紀中葉まで、ノーザン・リヴァーズでの交易は相対的に小規模なものにとどまり、その活動はポルトガル人とその子孫を中心としたかなり限定的な範囲の人々によって主に担われていた。

ところで、ノーザン・リヴァーズを含むアフリカ西海岸に最初に渡来し、アフリカ人との交易活動を行ったのは、1364年にヴェルデ岬（Cape Verde：現在のセネガル共和国の首都ダカールがあるアフリカ大陸西端の岬）に到着したフランス人商人たちであった、とする説がある[3]。しかし、大局としてみるならば、アフリカ西海岸に最も初期に進出し、そこでの交易活動に最初に広く従事したのは、やはり海洋帝国ポルトガルの航海者と商人たちであったろう。ポルトガルは、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカの３大陸を結ぶ大西洋に面するという有利な地理的条件に加えて、王権による中央集権化が他のヨーロッパ勢力に先んじて進行していたこともあって、15世紀以降のいわゆる「大航海時代」に積極的な海外進出を展開した。ポルトガル人は、1440年代中葉にヴェルデ岬を回り、1470年代にはギニア湾沿岸部を越えて現在のガボンにまで到達している。さらに、ポルトガル人は、1482年、金や象牙などの交易による利益を確保するために、現在のガーナ沿岸部のエルミナ（Elmina）に城砦を建設している。

当時アフリカ西海岸に渡来したポルトガル人商人や船員のなかには、ユダヤ人や逃亡中の犯罪者などが含まれており[4]、彼らのなかにはやがてアフリカ沿岸部に定住する者も現れるようになった。そして、そうしたポルトガル本国社会を捨て、アフリカ西海岸に定住するようになったポルトガル人男性と現地人女性たちとの間に形成されたのが、ランサドス（lan-

çados）という混血層である。ヨーロッパ人の名前、アフリカ人の母親、そして、しばしばカトリックの信仰をもつランサドスたちは、15世紀以降、ノーザン・リヴァーズの交易活動において重要な役割を果たすようになる。

先に引用したイギリス人海軍士官の記述にもあるように、この地域に渡来したヨーロッパ人商人が交易を行うためには、伝統的にまず現地の首長と話し合いをもち、首長あるいは有力者に庇護者になってもらう必要があった。そして、アフリカ人の庇護者はヨーロッパ人商人に交易や生活のための土地の使用を認め、また、彼らの生命や商品の安全を保障する代わりに、ヨーロッパ人から地代、関税、手数料などの様々な名目で報酬を受け取っていた。ヨーロッパ人とアフリカ人の両方の商品や言語に通じていたランサドスたちは、そうした両者の仲介役としてノーザン・リヴァーズの交易の場で活躍することとなったのである。

16世紀末以降になると、オランダ、イギリス、フランス、そしてアメリカがアフリカ西海岸に進出するようになり、沿岸交易をめぐって欧米諸国間の競争が激化した。そうしたなか、ポルトガルは、17世紀にはアフリカ西海岸の交易拠点の多くを失い、その交易は衰退の一途を辿った。しかし、もともとポルトガル社会のいわば「アウトロー」の階層を父方の先祖とし、しばしばポルトガル人たちからも軽蔑されていた現地化したランサドスたちは、こうした時代の変化に機敏に対応し、非ポルトガル人商人との交易も積極的に手がけ、少なくともノーザン・リヴァーズにおいては、特にイギリス人商人による交易活動が活発化する18世紀中葉まで活躍を続けていたものと考えられる。

18世紀中葉以降、ノーザン・リヴァーズでは主にイギリス人による交易活動が広く展開されるようになった。こうしたなか、シエラレオネ入植地を統轄する特許会社として1791年に発足したシエラレオネ会社（Sierra Leone Company）も、ノーザン・リヴァーズをシエラレオネへの食糧供給地およびフータ・ジャロンとの有望な交易ルートとみなして1795年にポンガス（Pongas, Pongos）川流域に独自の商館を置き、ヌネズ川からムラコリ川までの流域で活動するヨーロッパ人商人をエージェントとしながら交易

活動を展開するようになった。その後、シエラレオネ会社は、英仏間の戦争の影響やノーザン・リヴァーズでの奴隷貿易への嫌忌のために1802年には同地域から撤退するが、それと入れかわる形で今度は、それまでの白人商人に加えて、シエラレオネのアフリカ系人が小規模零細の商人として、あるいはイギリス人商人などの使用人として、ノーザン・リヴァーズに進出するようになった。

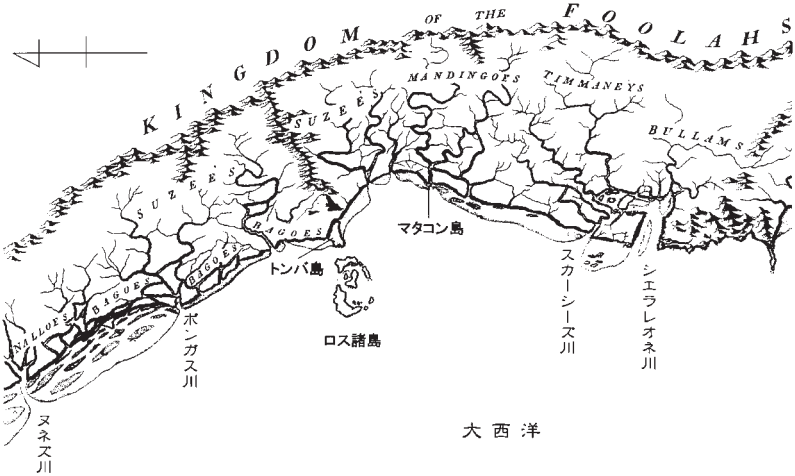
マタコン島は、こうしたノーザン・リヴァーズのうち、特にシエラレオネに程近いモリビア（Moribiah, Moribaya, Morébaya）川の河口とベレイラ（Bereira, Bereire, Berie Erie, Berrie Erie）川・フォリカリア（Fouricariah, Forecariah, Forekaria, Kise Kise, Kissey）川との河口に挟まれた、マングローブが群生する半島の沖合いに位置していた。MIP内の史料によれば、マタコン島は、ロス諸島（Îles de Los: 現在のギニアの首都コナクリConakry沖）から南東に22マイル（約35キロメートル）の距離にあり[5]、また、1854年にマタコン島を訪問した『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』（*The Illustrated London News*）紙の特派員は、同島を、陸地から1マイル（約1.6キロメートル）、シエラレオネ（現シエラレオネ共和国の首都フリータウン〔Freetown〕）から北西に42マイル（約67キロメートル）の位置にあると伝えている[6]。

マタコンという名称の起源は定かではないが、一説によると、それは、かつてこの島を訪れたポルトガル人が財宝を隠し、同地を「隠し場所」と呼んだことに由来するともいわれている[7]。

1780年代後半にシエラレオネに滞在した前述のマシューズ船長は、当時のマタコン島とその周辺地域の様子を次のように伝えている（図2参照）。

> トンバ（Tomba）[8]の南方に向けて、陸地は東方向にくびれ、それとロス諸島から8リーグ[9]ほど南東にあるマタコンと呼ばれる地点までの間に深い湾を形作っている。この湾のちょうど底部には、キア（Quia）、ポルト（Porte）、ブリア（Burria）という川がある。キア川は、交易が極めて盛んな所で、異なる支流に大きな町がたくさんあり、そ

図2　イギリス人船長が描いたノーザン・リヴァーズ



（注）　イギリス王立海軍のジョン・マシューズ船長は，1785年９月，商館建設などの任務のためにシエラレオネに到着した．これ以後，彼は1787年まで同地に滞在し，その間に見聞した現地の文化，慣習，交易，民族，地理などを書簡の形式で書きとめ，それらをイギリスに帰国後に出版した．この地図に描かれた，ナロ（ナル），バゴ（バガ），スゼ（スス），ティマネ（テムネ），ブラム（ブロム），フラといった諸民族の地理的分布は，今日のそれにかなり近いものといえる．

（出所）　John Matthews, *A Voyage to the River Sierra Leone: Containing An Account of the Trade and Productions of the Country and the Civil and Religious Customs and Manners of the People*, 1788 (new impression, London: Frank Cass, 1966).

のほとんどにはヨーロッパ人の居住者がいる。ブリア川の主要な交易品は米である。現地人はスゼ（Suzeés）であり、稲作に長けており、交易にも熱心である[(10)]。

また、シエラレオネ入植地に対する反乱者の身柄引渡しを要求するために1802年にノーザン・リヴァーズに派遣されたイギリス人船長リチャード・ブライト（Richard Bright）は、同年９月29日付の日誌のなかで、船上から眺めたマタコン島の風景を次のように記述している。

水辺から緩やかなスロープを描くマタコンは、心地よく、かつ豊かな姿を有している。そこには、草と林が混在しているようにみえる。野

生の豚が多くみられ、豊かな湧き水がある[11]。

18世紀までのマタコン島が沿岸交易においてどのような役割を担っていたのかは、必ずしも定かではない。しかし、少なくとも18世紀までの史料には、ヨーロッパ人商人がマタコン島において交易活動を本格的に展開していたという事実を伝えるものはみあたらない。しかし、19世紀初頭前後の時期になると、こうした状況には次第に変化がみられるようになる。前述のブライト船長がマタコン島沖を航行した1802年頃、詳細は不明ではあるが、同島にはすでにシモンズ（R. Simmons）という名前のイギリス人と思われる商人が居住するようになっていた[12]。

（2）民族集団と首長国の分布

ノーザン・リヴァーズに最も古くから居住していたと考えられるアフリカ人は、ニジェール・コルドファン語族ニジェール・コンゴ語派の下位グループであるウェストアトランティック（West Atlantic）語群に属する諸民族集団である。ウェストアトランティック語群の母体集団は、ポルトガル人航海者によってサペ（Sapes, Sapi, Çapes, Çapeos）と呼称された集団であったと考えられている。もともとサペは、大西洋沿岸部ではなく、現在のフータ・ジャロン高地のラベ（Labé）やティンボ（Timbo）周辺などを中心に分布していたが、ニジェール・コルドファン語族ニジェール・コンゴ語派のマンデ（Mande）語群に属する北マンデ系集団が内陸で移動を開始すると、13〜14世紀にその圧力を受ける形で内陸部から大西洋沿岸部一帯へと拡散し始めた[13]。サペ諸集団のうちバガ（Baga）系の集団は、少なくとも14世紀頃までには現在のコナクリ以北の海岸線から内陸にかけての地域に居住していたと考えられており、16世紀にこの地域を訪れたポルトガル人航海者によってその存在が確認されている[14]。また、現在ヌネズ川河口付近に居住するナル（Nalou）系やその上流に居住するランドゥマ（Landouma, Landoma）系の集団もウェストアトランティック語群に属する民族集団であり、両者ともに少なくとも16世紀までにはほぼ現居住地域に

定住していたものと考えられている。ウェストアトランティック語群のうち特にメル（Mel）諸語と呼ばれるグループに属するブロム（Bullom）系の集団は、14世紀にはすでに現在のギニア南部からシエラレオネ沿岸部一帯に定住し、また、同じくメル諸語のテムネ系集団は、1500年前後には現在のシエラレオネ北西部に到達していたものとみられている[15]。

他方、ニジェール・コルドファン語族ニジェール・コンゴ語派に属するマンデ語群には、大きく分けて北マンデ、南西マンデ、南東マンデの3つの下位グループがあり、そのうちの北マンデ系のいわば最前線集団であったのがスス（Susu, Soussou, Sosso, Soso, Suzeés）である[16]。現在ギニア沿岸部における最大民族であるススは、中央ギニアの少数民族ヤルンカ（Yalunka, Dialonke, Djallonke, Jalonke, Jalunka）と類似した言語を使用しており、そのことは、かつてフータ・ジャロンに居住していた北マンデ系集団が、北部のフータ・トロ（Futa Toro：現在のセネガル北部）地域から移動してきたフラ（Fula, Fulani, Fulbe, Peul）による作用によってススとヤルンカという２つのグループに分離した、あるいは当初からみられた両者間のわずかな差異がフラの刺激によって拡大されていったことを示すと考えられている。おそらく、ススは北部からのフラの圧力と支配を逃れてフータ・ジャロン高地から大西洋沿岸部に向けて移動していったのであり、それとほぼ同じ母体集団のうち、逆に高地に留まってフラに従属するようになったのがヤルンカであったと考えられる。北マンデ系のススは、移動の過程で他民族を吸収する一方、先住のウェストアトランティック語群の諸民族と衝突を繰り返しながら、少なくとも18世紀頃までには北はポンガス川北岸から南は大スカーシーズ（Great Scarcies）川付近までの沿岸部に広く定住するようになった。

ノーザン・リヴァーズの後背地を占めるフラの起源は必ずしも定かではないが、その言語はウェストアトランティック語群の北方グループに属する。フータ・トロ地方を起点として11世紀頃から移動を始めたフラは、17世紀には現在のナイジェリア北部、18世紀にはカメルーン、そして20世紀にはスーダンに到達し、実に1000年にもわたる長い歳月をかけて西アフリ

表1　ノーザン・リヴァーズの言語分類

語　群	ウェストアトランティック語群		マンデ語群
グループ	北　方　系	南　方　系	北マンデ系
言語／民族	フラ ナル	バガ ランドゥマ テムネ ブロム	スス ヤルンカ

（出所）　真島一郎「西大西洋中央地域（CWA）とポロ結社の史的考察――シエラレオネ，リベリア，ギニア，コートディヴォワール」『アジア・アフリカ言語文化研究』第53号，1997年，5－9ページ; Harold D. Nelson et al., *Area Handbook for Guinea*, second edition, Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1975, pp. 62–73を参考に筆者作成.

図3　ノーザン・リヴァーズの民族集団分布

（出所）　Bruce L. Mouser, ed., *Guinea Journals: Journeys into Guinea-Conakry during the Sierra Leone Phase, 1800–1821*, Washington D.C.: University Press of America, 1979, p. 3を基に筆者作成.

カの広大な地域に拡散した。フラは、少なくとも15〜16世紀頃にはフータ・ジャロン高地に到着し始め、それ以後も断続的に流入を続けたものとみられている。フータ・ジャロンに初期に到着したフラはまだイスラーム化されていなかったが、17世紀にティンボを中心に流入してきたフラにはムスリム商人やイスラーム教師が多く含まれていた。フラは当初、ススやヤルンカ、あるいはその母体集団と共存しながら生活していたが、その一方で、土地の使用などをめぐってそれらと対立することも少なくなかった。そうしたなか、1720年代、諸首長がティンボに参集し、フラのアルファ・カラモコ（Alfa Karamoko, Musa Ibrahim, Alfa Ibrahim Sembegu）に対してアルマミ（Almamy：イスラーム最高指導者）の称号を与えた。そして、アルファ・カラモコは、これを機にジハード（聖戦）を宣言して周辺民族を次々に隷属化し、イスラーム国家を建設した。その後、フータ・ジャロンのイスラーム国家は、フランスの実効支配下に入る1896年まで内紛を抱えながらも存続し、イスラーム教育や遠距離交易の拠点として重要な役割を担った[17]。また、同国家は、ノーザン・リヴァーズにまで勢力圏を拡大し、その歴代アルマミは、大西洋沿岸部の諸首長に対して庇護を与えたり紛争の仲介をしたりする代わりに、貢物を受け取っていた[18]。

それでは、19世紀初頭のノーザン・リヴァーズ、特にマタコン島周辺の政治情勢はどのようなものであったのだろうか。図４は、19世紀のマタコン島周辺地域の政治勢力を図示したものである。前述のとおり、もともとマタコン島周辺には、ウェストアトランティック語群のブロムなどが居住していたが、やがて北マンデ系のススがフラの圧力を受けてフータ・ジャロン高地から移動し、定住するようになっていた。この結果、19世紀初頭、マタコン島の対岸地域には、ススやブロムなどを中心とする複数の首長国が形成されていた。

まず、マタコン島対岸地域の北部にはスンブヤ（Sumbuyah）と呼ばれるススの下位集団がスンブヤ首長国を築いていた。19世紀後半にシエラレオネ政府通訳の要職にあったトーマス・ジョージ・ローソン（Thomas George Lawson）が1875年７月24日に作成した文書によれば、スンブヤとは「人々

の混合」（mixture of people）という意味であるという。おそらくスンブヤあるいはスンブヤ＝ススは、ススがブロムなどとの混血を進める過程で形成された集団であろう[19]。スンブヤ国の首都は、スンブヤ川河口から20マイル（約32キロメートル）上流のワンカフォン（Wankafong）に置かれていた。

スンブヤ国の南側にあるベレイラ、フォリカリア、マリギア（Maligia）といった町を勢力圏下に置いていたのは、北マンデ系集団のなかでも特にマンディンゴ（Mandingo）と呼称された集団を中心とするモリア（Moriah, Kissi Kissi, Moribia）首長国であった。モリア国の首都はフォリカリアに置かれ、同国ではイスラーム化がかなり進んでいた。同国は、フータ・スカーシーズ回廊（Futa Scarcies Corridor）と呼ばれる、内陸と沿岸部を結ぶ長距離交易ルートの一部に位置しており、特にフォリカリアやマリギアが同交易ルートの拠点として栄えていた。しかし、逆にこうした商業上の利権が存在していたために、モリア国内では諸首長間の内紛が絶えず、19世紀には周辺首長諸国を巻き込んだ紛争がしばしば展開された。

モリア国の南側、特にムラコリ川以南を支配していたのは、ブロムなどから成るサモ（Samo, Samu, Samoo）と呼ばれる首長国であった。サモ国は南北に二分され、北部はモリカニア（Moricania）と呼ばれて主にイスラーム化されていたのに対して、南部の人々は非イスラーム教徒が多数派を占めていた。

マタコン島の最も初期の定住者集団は、のちにサモ＝ブロム（Samo Bullom）と呼ばれるようになるブロム系集団、あるいはそれと近親的な関係にある諸集団であった[20]。前述したイギリス人船長ブライトの日誌（1802年10月27日付）のなかには、次のような記述がみられる。

> 伝え聞いたところによると、フェンダン・モドゥ（Fendan Modu, Finda Moodoo）は、かつてマウリカヌ（Maurikanou, Mori Kanu）とブロムの人々からマタコンを買い取ったとして、購入に基づく同島への所有権を主張しているという。しかし、まだ彼はマタコンを占有してはおら

図4　マタコン島周辺の首長国

（出所）　Mouser, ed., *Guinea Journals*, p. 17を基に筆者作成.

ず、同島は依然として後者の人々の手中にある[21]。

マタコン島を購入したという、スンブヤ＝ススの首長であるフェンダン・モドゥの主張の真偽はともかくとしても、この史料が示しているのは、少なくとも1802年の時点でマタコン島の所有を伝統的に主張しえた、あるいはそこに定住していたと推察されるのは、ブロム系の集団あるいはそれにテムネなどを加えたウェストアトランティック語群の諸民族集団であったという点であろう[22]。ところが、後述するとおり、やがて1820年代になると、マタコン島はスンブヤやモリアといった北マンデ系の首長がその所有を主張するようになる。

（3）シエラレオネ植民地の形成

現在のフリータウン周辺とそれが北端に位置する半島のことを「セラ・レオア」（Serra Leoa：ライオン山地の意）と呼称したのは、15世紀中葉に同地に来航したポルトガル人航海者であった。しかし、少なくとも16世紀初頭まで、セラ・レオアという地名は、同半島を指す場合とは別に、ロス諸島から現リベリア領のマウント岬（Cape Mount）までのかなり広範な沿岸部を指す用語としても広く用いられていた[23]。そして、後者の意味でいえば、少なくとも当時のポルトガル人航海者や商人にとって、マタコン島は「セラ・レオアの一小島」にほかならなかった。

セラ・レオアに来航して交易に従事し、また限定的ながらもキリスト教の宣教活動を展開した最初のヨーロッパ人はポルトガル人であったが、同沿岸部にシエラレオネという名称の初の入植地（植民地）を建設したのはイギリス人であった。

18世紀末のロンドンでは、家内労働のためにアフリカや植民地から連れてこられた奴隷たちがその後自由民になったり、アメリカ独立戦争でイギリス本国側に従軍することを条件に解放された元奴隷たちが英領ノヴァスコシア（Nova Scotia：現在のカナダ南東部）を経由して流入してきたり、あるいは、アフリカ交易の船舶に乗船していたアフリカ西海岸出身の船員が

定住化するようになるなど、アフリカ系人コミュニティがごく小規模ながらも形成され始めていた。しかし、そうしたアフリカ系人の大半は貧困層であり、しかも彼らは救貧法の対象にもされなかったために、極貧の生活を送る者が多くみられた。

そうしたなか、奴隷貿易・制度廃止運動に熱心なイギリス人実業家や政治家らが、貧窮するアフリカ系人への支援に乗り出した。彼らはアフリカ系人貧窮者を支援するための委員会を発足させ、寄付金を募り、困窮するアフリカ系人に対して食事提供などの活動を展開するようになった。しかし、そうした対応だけでは根本的な問題の解決にならないと判断した彼らは、やがて環大西洋地域のどこかに在英アフリカ系人を入植させることができる適切な土地を探し始めるようになる。そして、彼らが注目したのが、ヘンリー・スメスマン（Henry Smeathman）というアマチュア植物研究家によるひとつの提案であった。1771年に現シエラレオネ領のバナナ諸島（Banana Islands）を新種植物採集のために訪問し、その後数年間にわたって同地に滞在した経験をもっていたスメスマンは、帰国後、シエラレオネ（Sierra Leone）川の周辺がアフリカ系人の入植地として適していると提案したのである。アフリカ系人貧窮者支援のための委員会は、同提案に対しては当初かなり慎重であったが、結局、スメスマン提案を支持するアフリカ系人に突き動かされる形で入植計画を進め、そしてついに1787年４月、イギリス政府の支援を受けて、アフリカ系人、ヨーロッパ人女性、大工職人、船員などを含む411人をイギリス南西部のプリマス（Plymouth）の港からシエラレオネに向けて出航させたのであった[24]。

この入植計画を推進する上で指導的役割を果たしたのが、奴隷貿易・制度廃止活動家のグランヴィル・シャープ（Granville Sharp）であった。シャープは、新たにシエラレオネ川付近に建設されることになるアフリカ系人入植地を「自由の土地」（Province of Freedom）と名づけ、それが拝金的な西洋文明に毒されることのない、アフリカ系人入植者のための牧歌的で自治的な共同体創出の場となることを願った。他方、1787年５月にシエラレオネに到着し、テムネの首長から土地の使用を認められて上陸を果たした入

植者たちは、上陸地点周辺に集落を形成し、それを入植計画の後援者であるシャープに因んでグランヴィル・タウン（Granville Town）と名づけた。

しかし、希望と不安の気持ちが激しく交錯する入植者たちを上陸後に待ち受けていたのは、想像をはるかに超えた過酷かつ悲惨な生活であった。すでにプリマスからの約1ヵ月ほどの航海の間に、約5分の1の入植者が死亡していたが、あいにくシエラレオネへの到着時期が雨季と重なってしまったこともあって、到着から4ヵ月のうちにさらにほぼ同数の入植者がマラリアや赤痢といった感染病などに罹患して死亡した。入植者は、当初は穀物の収穫ができなかったために、持ってきた食糧が底をつくと、身の回りの品を現地住民と交換して食糧を入手しなければならなかった。入植者がこうした悲惨な状況下にあることを知ったシャープらは、1788年6月、白人を中心とする39名の入植者を新たにシエラレオネに送ったが、それも焼け石に水であった。そして、グランヴィル・タウンは、1789年12月、入植者と対立する現地首長の攻撃によって完全に破壊されてしまうのである。

このように初期入植は事実上失敗に終わるが、奴隷貿易・制度廃止活動家たちは、1790年に入植地建て直しのためにセント・ジョージ・ベイ会社（St. George's Bay Company）を設立し、前述のとおり、翌年にはイギリス政府の特許をえてシエラレオネ会社を発足させた。そして、同会社は、1791年にエージェントを派遣して元の場所とは別のところに新しいグランヴィル・タウンを建設する一方、1792年1月には、アメリカの元奴隷でノヴァスコシアに移住していたアフリカ系人とその家族1,190名を入植のためにシエラレオネに向けて出航させることに成功した。そして、シエラレオネ到着後、ノヴァスコシアンが中心となって旧グランヴィル・タウンに建設したのが、フリータウンという町であった。さらに、ジャマイカのプランテーションから逃げ出したマルーン（Maroons）と呼ばれる元奴隷で、その後ノヴァスコシアに移動させられていた約500名が、1800年8月、やはり同地からシエラレオネに向けて出航した。また、1807年、奴隷貿易を禁止する法律がイギリス議会で可決され、イギリス海軍による奴隷船の拿捕がアフリカ西海岸で開始されるようになると、シエラレオネは奴隷船から

解放された奪還奴隷（the re-captured, recaptives, Captured Negroes）を上陸させるための拠点とされ、多くの元奴隷が同地に流入するようになった。こうした奪還奴隷は、フリータウンの周辺などに出身民族ごとの集落や町を形成していった。

このように、シエラレオネ入植地は、①イギリスからの初期入植者（1787年）、②北米からのノヴァスコシアン（1792年）、③ジャマイカからのマルーン（1800年）、④アフリカ西海岸各地出身の奪還奴隷（1807年頃〜）、という主に４つのグループの入植によって形成されていった。しかし、文化的背景や政治意識が大きく異なるこれらの４つのグループは、当初、協力するよりもむしろしばしば対立した。特に、(1)シエラレオネ会社の統治に反発する一部のノヴァスコシアンと同会社の支配に協力しようとするマルーン、(2)英語を理解するなどすでにある程度西洋化していたノヴァスコシアンやマルーンと解放されたばかりでまったく西洋化していなかった奪還奴隷、そして、(3)奪還奴隷の諸民族、といった諸グループの間には、それぞれ深い亀裂と不信感がみられた。しかし、こうした諸グループ間の複雑な対立関係は、各グループが第一世代から第二世代への移行をほぼ終える1870年代頃になるとある程度解消され、そこに、アフリカ西海岸各地と欧米・西インド諸島の諸文化を融合した、シエラレオネ独特のクレオール（Creole）のアイデンティティと文化が形成されるようになった[25]。

他方、シエラレオネの管理を行っていたシエラレオネ会社はやがて経営に行き詰まり、同入植地は1808年１月１日をもってイギリス政府の直轄植民地（Crown Colony）へと移行された。

3. マタコン島をめぐる権利の設定とモリア紛争
——1802－1826年

1802年、モリア国では、トゥーレ（Touré, Tura）家のアムラ（Amura, Amara）という指導者が諸首長によって同国の最高首長に選出された。しかし、アムラはその後、内陸からのキャラバンに対して、フォリカリアで

交易を行うように命じ、それよりも沿岸部に立ち入ることを禁じるという、いわばフォリカリア周辺を優遇する措置を講じたため、沿岸部社会の強い反発を買うようになった。そして、沿岸部の諸首長は、マリギアの首長セネシ（Senesi）を指導者にしてアムラと対決する姿勢を強めるようになる。

ところで、19世紀初頭、ノーザン・リヴァーズにはまだフランス人商人は進出しておらず――フランス人商人による同地域への進出は1830年代末以降のことになる――、そこでの沿岸交易は、アメリカ人、フリータウンから来たノヴァスコシアンとマルーン、そして、特にイギリス人の商人たちによって担われていた。こうした商人たちは、ノーザン・リヴァーズにおいてしばしば奴隷貿易を手がけていたため、モリア国におけるフォリカリアのアムラ（内陸部）とマリギアのセネシ（沿岸部）との対立においては、奴隷貿易を容認する前者のアムラ側を支持した。これに対して、フリータウンを拠点とする商人たちは、奴隷貿易以外のいわゆる「合法貿易」を支持する後者のセネシ寄りの立場を示した。シエラレオネの植民地政府は、奴隷貿易に対しては強く反発したものの、その一方で、フータ・ジャロンのティンボからモリア国を経由してフリータウンにいたる交易ルートを開拓したいと考えていたこともあって、アムラに接近してその懐柔を試みようとした。しかし、アムラは、シエラレオネの商人が自分に敵対するセネシ側を支援しているとして、こうしたシエラレオネ政府の働きかけにはなかなか応じようとはしなかった。

そうしたなか、1820年、アムラはついにマリギアを攻撃し、これに対して、セネシは周辺のスンブヤやモリカニアからの援軍を受けて応戦した。同紛争の勃発によって、ノーザン・リヴァーズの沿岸交易は事実上の麻痺状態に陥ったが、やがて後背地フータ・ジャロンに位置するフラ国家が介入し、両者の仲介役を果たしたために、モリア、スンブヤ、モリカニアを巻き込んだこの紛争は、1822年に一旦終結をみた。

しかし、戦闘終結から間もなく、今度はセネシに代わって前述のスンブヤ国の最高首長フェンダン・モドゥが台頭し、モリア国のアムラと対決するようになる。モドゥ陣営は、ポンガス川からフリータウン対岸のブロム

海岸（Bullom Shore）までの沿岸部一帯を勢力圏下に置き、他方、アムラ陣営は、内陸のモリアの諸首長を支配下に置いていた。両陣営間の紛争は1823年に勃発し、シエラレオネのほとんどの商人は、この紛争を嫌って活動の拠点をより南部の大小スカーシーズ川からシエラレオネ川へとシフトさせた。しかし、こうした紛争状態を逆にビジネスチャンスと捉えて、あえてノーザン・リヴァーズに進出しようとする者もあった。それが、当時ビジネス上のパートナーシップを組んでいたスティーブン・ガッビドン（Stephen Gabbidon）とウィリアム・ヘンリー・サヴェイジ（William Henry Savage）という2人のシエラレオネ商人たちであった[26]。

ガッビドンは、当時フリータウンのビジネス界で最も成功したマルーンのひとりであり、1825年には市長に指名され――ただし、ビジネスに専心したいとして同職を辞退――、また、1831年には駐屯軍の士官に任命されるなど、マルーンのなかでも指導的役割を果たした人物である[27]。サヴェイジは、アフリカ人の父親とイギリス人の母親のもとにロンドンで生まれ、1808年に学校の校長としてシエラレオネに赴任してきたが、やがて商人に転向して一時は奴隷貿易も手がけていた人物である。その後、1821年にロンドンに渡り、法学を修めてシエラレオネに帰国したサヴェイジは、フリータウンに法律事務所を開設して法律家として活動するかたわら、ガッビドンと組んで商業活動も手がけた[28]。

ガッビドンとサヴェイジは、ほとんどのシエラレオネ商人がモリア紛争を嫌ってノーザン・リヴァーズから撤退していくなかで、あえて危険をおかして同地域に進出しようとした。彼らは、1825年12月30日にフォリカリアで一方の紛争当事者であるアムラとマタコン島に関する賃貸借契約書を交わし、毎年アムラとその後継者に対して100鉄棒[29]に相当する品物を支払うという条件で同島の利用権を獲得した[30]。

このときガッビドンとサヴェイジがアムラと結んだ契約書によれば、マタコン島はもともと沿岸部に住む混合民族が伝統的に所有権を主張していたが、その後アムラの祖父であるボッカリー・マンガ（Bocarrie Manga）が混合民族に対する品物の支払いによって同島を所有するようになった、

とされていた[31]。また、同契約書には、貸借後の同島の使用目的については、「（ガッビドンとサヴェイジが同島で）商業交易と農業における共同事業を行う」[32]とのみ記されていたが、どうやらガッビドンとサヴェイジは、マタコン島の利用権を獲得した上で、そこに牛の集積拠点をつくり、フリータウンに駐留する軍隊向けの食肉供給ビジネスを展開しようとしていたようである。

しかし、ことは彼らの思惑どおりには運ばなかった。シエラレオネ政府の総督代理であったケネス・マコーレー（Kenneth Macaulay）は、同賃貸借契約が結ばれたとの知らせを受けると、まずガッビドンとサヴェイジに対してマタコン島からの立ち退きを命じた[33]。そして、マコーレーは翌年3月に総督に就任すると、モリア紛争の当事者がシエラレオネ政府に対して和平の仲介を依頼してきたのを受けて、ダラ・モドゥ（Dala Modu）という、フリータウン近郊で広く交易活動に従事していたスンブヤ＝ススの有力者の協力をえて、モリア紛争の仲介に乗り出した。そして、1826年4月18日、マコーレー総督は、スンブヤ＝ススの諸首長とモリアのトゥーレ家の代表を一堂に会し、包括的な和平条約の調印を実現させた。同条約は、モリア紛争を終結させただけではなく、スンブヤ＝ススとモリアのトゥーレ家の双方に対して、南はムラコリ川のコンタ（Conta, Contah）から北はポンガス川のフェリグナ（Ferighna, Faringhia）までの海岸や河川とそこから内陸に1マイルの地域に対するイギリスの主権を認めさせた。その上で、1826年条約は、マタコン島についても次のように定めた。

> ケネス・マコーレーは、一方で彼と彼の後任者である（シエラレオネ）植民地の諸総督を、他方でグレート・ブリテンおよびアイルランドの国王を代表して……、マタコン島の主権と所有権を引き受けるとともに、イギリス王室の友好と善隣のもとで、同地をすべての周辺民族の船とカヌーのための中立的かつ自由な停泊地として維持する[34]。

このようにして、1826年条約によって、マタコン島は、第一に、その主

権がイギリスに帰属すること、第二に、イギリスによって周辺諸民族が自由に使用できる中立的な場所として維持されること、が合意されたのである。

ここに、マタコン島の使用・所有・領有をめぐる複雑な動態の原形が、モリア紛争をひとつの背景として形成されることとなった。すなわち、まず1825年12月にガッビドンとサヴェイジがモリアの首長アムラとの間でマタコン島の賃貸借契約を結んだことによって、同島を使用する賃借権あるいは利用権が設定された。そして、それは、賃借人（ガッビドンとサヴェイジ）の死後、賃貸人（現地首長）の意思とは関係のない独立した権利として、後者の承諾なしに第三者（商人）の間を次々に相続、転売、譲渡されていくようになる。そして、このようにマタコン島の賃借権がもとの賃貸借関係から完全に離脱してしまい、第三者（商人）の間で次々に譲渡されるようになると、賃借権を取得した第三者（商人）は、当然のことながら、賃料を賃貸人（現地首長）に支払っている限りにおいては、同島を自由に使用あるいは転貸[35]することができるものと考えるようになり――なぜならば、彼らは、賃料とは別にその権利を購入あるいは相続したはずであるから――、利用権者としての強い権利意識、あるいは事実上の所有者としての意識さえ抱くようになっていく。もしここで、「マタコン島は誰のものか」[36]という問いを投げかけてみるならば、少なくとも「使用」という側面に照らしていえば、最初の賃貸借関係から離脱した利用権をもつ商人たちは、同島を自分たちのもの、あるいはそれにほぼ等しいものとしてみなすようになっていくのである。

他方、1826年条約によって、同島には、主権あるいは領有権という新たな権利概念が設定された。しかし、前述のとおり、同条約はマタコン島の主権をイギリスに帰すことを定めてはいたものの、その条文（英語）のなかに出てくる「マタコン島の主権と領有」（sovereignty and possession of the island of Matacong）という概念は、今日的な意味でのそれと必ずしも同じ意味合いを有していたわけではなかった。現地首長側がそれをどのように理解していたのかは定かではないが、少なくともシエラレオネ政府側は、イ

ギリスが「マタコン島の主権と領有」を引き受けるということを公式の領有化とみなしてはいなかった。たしかに1877年には、シエラレオネ政府は、1826年条約を根拠にマタコン島の領有権を主張するようになるが[37]、それは1860年代以降のフランスによるノーザン・リヴァーズへの帝国主義的進出に対抗する必要性から生じた主張にすぎなかった。フランスの脅威がまだみられなかった1820年代、シエラレオネ政府は、マタコン島の主権を取得するということとそれを植民地化するということを同一視せず、むしろ主権の取得とは、政治的な影響力はあるものの統治の責任や財政的な負担を必ずしも伴わない勢力圏（sphere of influence）あるいは「非公式帝国」（“informal empire”）ともいうべき領域範疇のなかに同島を組み入れることにほかならなかった。因みに、1826年条約は、もともとイギリス本国政府の了承なしにマコーレー総督が独自の判断で結んだものであり、その後イギリス本国によって正式に批准されることもなかったといわれている[38]。事実、イギリス本国政府は、1826年の条約調印以後も長年にわたってマタコン島を公式な自国領土とはみなさなかった。

ここで、「マタコン島は誰のものか」という問いを今度は「領有」という側面に照らして考えてみるならば、同島は、1826年条約によって事実上イギリスの勢力圏下に入ったものの、それはイギリスの「公式帝国」の一部ではなく、その意味では、この時点でのマタコン島の領有関係は必ずしも明確ではなかったといえる。

なお、同条約のなかにみられた、マタコン島をすべての周辺民族の船舶が利用できる中立的かつ自由な停泊地とする旨の合意事項は、やがて積極的な措置としてではなく、むしろシエラレオネ政府が同島での交易活動に関税を課さず、そこでの自由な交易を認めるという消極的な自由放任措置へと変質していくことになる。

さらに、マタコン島の所有権についても、1825年から1826年にかけて微妙な変化が生じた。前述のとおり、マタコン島はもともとウェストアトランティック語群の諸民族に帰属していたが、それがやがてスンブヤやモリアの北マンデ系の首長によって購入あるいは奪取されたものと考えられる。

それでも1825年以前は、マタコン島の所有をめぐる問題とは、その正当な所有者が、スンブヤの首長なのか、モリアの首長なのか、はたまたブロムのようなウェストアトランティック語群の民族の首長なのかといった点にあった。ところが、アムラがシエラレオネ商人とマタコン島の賃貸借契約を結んだことによって、そこに「賃貸借契約書（賃貸人用原本）の保管者」という新たな「権利者」が生じ、所有問題がより複雑化することとなった。当初、賃貸借契約書の賃貸人用原本は、マタコン島の正当な所有者を主張するアムラとその後継者によって保管されていた。しかし、その後、同契約書が他の首長へと移転されるという事態が生じる。そして、同契約書の保管者は、やがて自らをマタコン島自体の所有者と自任するようになり、今度はフランスにマタコン島の主権を譲渡してしまうといった錯綜した事態へと発展していくのである。

4. ナタニエル・アイザックスの交易活動
——1844－1854年

ガッビドンとサヴェイジは、一旦はマタコン島からの立ち退きを命じられたものの、その後同島にもどって交易活動を行っていたようである。やがて２人はパートナーシップを解消し、サヴェイジは1837年には他界してしまうが、マタコン島はその後もガッビドンによって使用された。ガッビドンは、ロンドンの金融業者に約8,000ポンドの負債があり、その資金を捻出するためにロンドンに渡って植民地省を訪ね、マタコン島にある彼の資産と権利をイギリス政府に買い取ってくれるように働きかけたりもしたようであるが、結局断られたという[39]。その後、1839年にガッビドンが死去すると[40]、息子のウィリアム・ガッビドン（William Gabbidon）がマタコン島の利用権を相続し、同島でビジネスを展開するようになった。また、その具体的な経緯は定かではないが、1842年３月、息子のガッビドンは、父親がアムラと結んだのと同様の賃貸借契約を今度はブロム系の４名の首長と結んでいる[41]。その後、ガッビドンは、1844年３月、マタコン

島を担保にしてジョン・ドーソン（John Dawson）とジョージ・アレクサンダー・キッド（George Alexander Kidd）という人物から280ポンド1シリング9ペンスの借金をする。しかし、ガッビドンは、同年7月までに支払うべき分割返済金25ポンド9シリング3ペンスを滞納したために、パートナーであるキッドの死亡によって唯一の債権者となっていたドーソンが、同年8月、抵当権が設定されたマタコン島の利用権をすぐに第三者に売却してしまう。このとき、ドーソンからマタコン島の利用権を購入したのが、当時シエラレオネを拠点にノーザン・リヴァーズなどで手広く交易活動を行っていたナタニエル・アイザックス（Nathaniel Isaacs）というユダヤ系イギリス人商人であった[42]。

アイザックスは、1808年、イギリス南東部カンタベリー（Canterbury）のユダヤ人の家庭に生まれた。その後、叔父を頼ってセント・ヘレナ島（St. Helena）に渡り、さらに1825年、17歳のときに南アフリカのポート・ナタール（Port Natal：現ダーバン　Durban）へと移った。ナタールでは、ズールー（Zulu）王国との交易活動などに従事し、ズールーの偉大なる王シャカ（Shaka）とも個人的な交流をもった。1826年には、アイザックスの知人のもとで働くホッテントット（Hottentot）の使用人2名がシャカの支配下にある首長の妻を強姦するという事件を起こしてしまったために、アイザックスはシャカにその連帯責任をとらされてズールー軍に従軍を命じられ、ムジリカジ（Mzilikazi）率いるクマロ（Kumalo）軍との戦闘に参加した。このとき弱冠18歳であったアイザックスは、5,000名のズールー軍兵士の先頭に立ってよく戦ったが、戦闘の際に矢で背中を打たれて負傷した。1830年に南アフリカを離れたアイザックスは、その後イギリスに帰国し、1834年から西アフリカ交易を手がけるようになった。彼は、1840年代初頭までにはフリータウンに拠点を築き、前述のとおり、1844年にマタコン島の利用権を取得する。そして、アイザックスは、フリータウンの資産を売り払ってマタコン島に移り住み、同島を拠点に広範な交易活動を展開するようになるのである[43]。

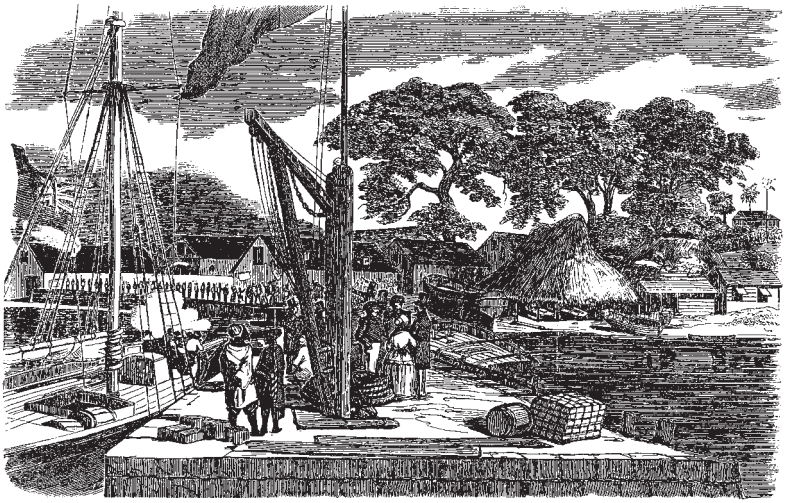
1854年にマタコン島を訪問した、前述の『イラストレイテッド・ロンド

ン・ニュース』紙の特派員によれば、当時マタコン島には、ススやバガなど約300名の現地住民が生活していたが、ヨーロッパ人の居住者はアイザックスしかいなかったという。島にはアイザックスが所有する埠頭、倉庫、作業所などのほか、一番高い丘の上には彼の邸宅兼事務所があり、そのすぐそばにはチャペルがあって、シエラレオネのウェスレヤン宣教団によって任命された者が聖日礼拝を毎週執り行っていた。また、チャペルでは、現地の子供たちのための日曜学校も開かれていた。島にはパンヤの木々が豊かに生い茂り、それが海上からマタコン島を特定するときの標になっていたという（図5参照）[44]。

マタコン島におけるアイザックスの商取引は、大変な盛況ぶりであったようである。フリータウンで交易活動を行う場合、商人や船主は、船舶の停泊料、輸出入関税（特にタバコや火酒といった輸入嗜好品に対する高額の関税）、カヌーやボートのライセンス料といった様々な負担を直接的あるいは間接的に強いられた。しかし、前述のとおり、マタコン島はシエラレオネ政府によって中立的かつ自由な停泊地とみなされ、そこでは停泊料や関税の徴収が一切行われていなかったために、同島には多くの商船が寄港するようになった。1853年の1年間にマタコン島に寄港した船の数は、イギリス、フランス、アメリカ船籍の商船を中心に80隻にものぼった[45]。特に、アメリカ船籍の商船は、フリータウンに向かう前にまずマタコン島に立ち寄り、そこで可能な範囲の取引を済ませた。

マタコン島は複数の河川の河口部近くに位置していたため、河川流域の現地商人が小船で商品を持ち込むのにアクセス上大変便利であった。特に雨季や強風のときには、現地商人は小船ではフリータウンに商品を運ぶことができなかったが、対岸にあるマタコン島には比較的容易に商品を運搬することができた[46]。また、アイザックスは、現地首長の親類縁者を船大工やクラークとして雇用したり、彼らに対して寛大な貸付を行ったりすることでその信頼を勝ち取ることも忘れなかった。現地商人がマタコン島に持ち込んだ商品――獣皮、砂金、胡椒、象牙、パーム油、蜜蝋、落花生など――は、アイザックスがタバコ、火酒、綿布、金属製品などと交換す

図5　マタコン島の風景



（注）1854年5月24日，マタコン島ではヴィクトリア女王の誕生日を祝う行事が行われた．このスケッチは，そのときの様子を描いたもの．この日，民兵による行進，楽隊の演奏，イギリス人商人アイザックス主催の夕食会などがもたれ，同島は一日中祝賀ムード一色に覆われた．スケッチには，埠頭，倉庫，小型帆船，カヌー，荷物用クレーン，パンヤの木などのほか，アフリカ人のムスリム商人，民兵，そしてシエラレオネ植民地から一時的に来訪したと思われるヨーロッパ人たちなどの姿が描かれている．

（出所）"Matacong, West Coast of Africa," *The Illustrated London News*, 2 December 1854, p. 552).

る形で買い取って倉庫に一旦保管し、それらは欧米の商船が寄港した際に転売されたり、アイザックス自身によって直接輸出されたりした。当時、マタコン島の輸出品として特に重要であったのは、19世紀中葉以降にノーザン・リヴァーズで栽培・輸出が広く行われるようになった落花生であった。落花生は、石鹸や潤滑油などの生産に必要な植物性油脂原料として特にフランスで需要が高かったので、アイザックスは、マタコン島から大量の落花生を同国に向けて輸出し、大きな利益を挙げた。

このように、マタコン島におけるアイザックスの商売は、実に順風満帆のようにみえたが、彼のマタコン島における活動は、突如その終焉を迎えた。1854年8月、シエラレオネのアーサー・エドワード・ケネディ（Arthur Edward Kennedy）総督のもとに、アイザックスがマタコン島で奴隷を所有

しているとの情報が寄せられた。すでにイギリスは、前述のとおり1807年には奴隷貿易を禁止し、次いで1833年には6年間の移行期間をもって奴隷制を廃止していた。このため、アイザックスが奴隷を所有しているとの通報が入ると、ケネディ総督はすぐに彼の逮捕を命じた。しかしアイザックスは、逮捕直前にマタコン島を脱出することに成功し、その後イギリスに帰国してしまうのである。アイザックスが逃亡したあとのマタコン島には、通報どおり、彼が所有していた奴隷が残されていたといわれている[47]。

アイザックスの逃亡後、マタコン島での商売は、彼のビジネス・パートナーとなったトーマス・リーダー（Thomas Reader）という人物によって引き継がれた。しかし、アイザックスとリーダーのパートナーシップは1860年頃に解消され、1869年からは、ランダル・アンド・フィッシャー（Randall & Fisher）というマンチェスター（Manchester）の会社が年間300ポンドの賃料でアイザックスからマタコン島を賃借して使用するようになった。同社は、アイザックスと同様、マタコン島を主に落花生の集積・輸出拠点として用いた。1872年６月にアイザックスがイギリスで死去すると、マタコン島の利用権は、遺言によって彼の娘夫婦であるピーター・マニング（Peter Manning）夫妻とウォルター・ルイス（Walter Lewis）という人物の３人に相続された。しかし、1874年６月、ルイスがアフリカ西海岸で死亡したために、その後マタコン島の利用権者はマニング夫妻のみとなり、ランダル・アンド・フィッシャー社は、同夫妻に賃料を支払いながら少なくとも契約上は1881年12月31日まで同島を使用した[48]。

（以下、次々号へ続く）

（注）

(1)　John Matthews, *A Voyage to the River Sierra Leone: Containing An Account of the Trade and Productions of the Country and the Civil and Religious Customs and Manners of the People*, 1788 (new impression, London: Frank Cass, 1966), pp. 142–143.

(2)　マングローブ（mangrove）は、熱帯や亜熱帯において海水と淡水が交じり合う海岸部や河口沿いの「汽水域」に叢生するヒルギ科などの植物の総称で、しばしばマングローブ林を形成する。

(3)　小川了『奴隷商人ソニエ――18世紀フランスの奴隷交易とアフリカ社会』、山川出版社、2002年、3－4ページ。

(4) André Donelha, *Descrição da Serra Leoa e dos Rios de Guinê do Cabo Verde (1625)/An Account of Sierra Leone and the Rivers of Guinea of Cape Verde (1625)*, Lisboa: Centre de Estudos de Cartografia Antiga, edition of Portuguese text, introduction, notes and appendices by Da Mota, Abelino Teixeira, and notes and English translation by P. E. H. Hair, 1977, p. 239.

(5) *Facts Regarding Lease of the Island of Matacong, West Coast of Africa*, December 1891, MIP 230.

(6) "Matacong, West Coast of Africa," *The Illustrated London News*, 2 December, 1854, p. 551.

(7) *Ibid.*; *Copy of Statement by P. Manning about Matacong*, n.d., MIP 177.

(8) 現在コナクリがある島の名称。

(9) リーグ（league）は距離を示す古い単位で、1リーグは約3マイルに相当する。したがって、ロス諸島からマタコン島の距離とされている8リーグは約24マイル（約38キロメートル）ということになる。

(10) Matthews, *A Voyage to the River Sierra Leone*, pp. 16–17.

(11) "Richard Bright Journal, September and October 1802," in Bruce L. Mouser, ed., *Guinea Journals: Journeys into Guinea-Conakry during the Sierra Leone Phase, 1800–1821*, Washington, D.C.: University Press of America, 1979, p. 32.

(12) "Alexander Smith Journal, December 1802," in Mouser, ed., *Guinea Journals*, pp. 134–135.

(13) 真島一郎「西大西洋中央地域（CWA）とポロ結社の史的考察――シエラレオネ、リベリア、ギニア、コートディヴォワール」『アジア・アフリカ言語文化研究』第53号、1997年、25ページ。

(14) Harold D. Nelson et al., *Area Handbook for Guinea*, second edition, Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1975, pp. 62–65.

(15) 真島「西大西洋中央地域（CWA）とポロ結社の史的考察」、25ページ。

(16) 同上論文。

(17) Peter B. Clarke, *West Africa and Islam*, London: Edward Arnold, 1982, pp. 84–85.

(18) Jean Suret-Canale, "The Fouta-Djalon Chieftaincy," in Micahel Crowder and Obaro Ikime, eds., *West African Chiefs: Their Changing Status under Colonial Rule and Independence*, Ile-Ife: University of Ife Press, 1970, p. 82.

(19) Thomas George Lawson, "Information Relative to the Neighbouring Countries," in David E. Skinner, *Thomas George Lawson: African Historian and Administrator in Sierra Leone*, Stanford: Hoover Institution Press, 1980, p. 87.

(20) *Copy of Part of Despatch from Administrator-in-Chief, Sierra Leone, to Colonial Office*, 19 November, 1891, MIP 108.

(21) "Richard Bright Journal, September and October 1802," p. 96.

(22) "Statement of Sattan Dowoda, the Accredited Messenger of Allimamy Bokharie King of the Moriah Country and A Sub-chief and Brother of Cardiettah Modoo, Chief of Calla Modiah," in Skinner, *Thomas George Lawson*, pp. 120–121.

(23) 真島「西大西洋中央地域（CWA）とポロ結社の史的考察」、27ページ; Donelha, *An Account of Sierra Leone and the Rivers of Guinea of Cape Verde (1625)*, p. 239.

(24) Christopher Fyfe, *A History of Sierra Leone*, Oxford: Oxford University Press, 1961, pp. 13–19.

(25) 今日、クレオールは、民族集団としてはクリオ（Krio）と呼ばれている。英語やアフリカ諸語などの混成語であるクリオ語（Krio）は、メンデ語やテムネ語とともに現在のシエラレオネにおける主要言語のひとつである。クレオール／クリオについては、たとえば、Christopher Fyfe, "1787–1887–1987: Reflections on A Sierra Leone Bicentenary," *Africa*, Vol. 57, No. 4, 1987, pp. 411–421; Leo Spitzer, *The Creoles of Sierra Leone: Their Responses to Colonialism, 1870–1945*, Ile-Ife: University of Ile-Ife Press (African edition), 1975; Akintola Wyse, *The Krio*

of Sierra Leone: An Interpretive History, London: C. Hurst & Co., 1989などを参照されたい。

(26) Bruce L. Mouser, "Guinea-Conakry During the Sierra Leone Phase, 1750 to 1850," in Mouser, ed., *Guinea Journals*, pp. 18–24.

(27) Cyril Foray, *Historical Dictionary of Sierra Leone*, Metuchen, N.J. and London: The Scarecrow Press, 1977, p. 77; Fyfe, *A History of Sierra Leone,* pp. 123, 178–179.

(28) Foray, *Historical Dictionary of Sierra Leone*, pp. 188–189; Nemata Amelia Blyden, *West Indians in West Africa, 1808–1880*, Rochester: The University of Rochester Press, 2000, p. 16.

(29) 鉄棒とは、もともとヨーロッパ人商人がアフリカ西海岸にもたらした商品のひとつであり、やがて奴隷などの他の商品をその本数で換算する一種の貨幣として用いられたものである。しかし、実際の鉄棒の重量・形状・価値は、時代によってかなり変動し、またアフリカ西海岸の地域によっても異なっていたようである（小川『奴隷商人ソニエ』、267－269ページ; 室井義雄『連合アフリカ会社の歴史　1879－1979年――ナイジェリア社会経済史序説』、同文舘、1992年、20－22ページ）。なお、1825年当時にマタコン島周辺で流通していた鉄棒の形状や1鉄棒の価値の詳細は定かではないが、参考までに、1842年時点でマタコン島の賃料支払いに用いられていた100鉄棒（5ポンド）相当分の品物一覧を以下に示しておく。

100鉄棒相当の品物（1842年当時）

品物（数量）	鉄棒（本）
火薬（25ポンド）	20.10
猟銃（2丁）	28.12
ギネー（4ピース）	32.24
ラム酒（4ガロン）	10.08
タバコ（15ポンド）	10.15
合計	100.69

（注） 1ポンドは約453.6グラム，1ガロン（英）は約4.546リットルに相当する．ギネー（guinea）とは，アフリカ西海岸交易で盛んに取引されたインド産の青色布地のこと．

（出所） *Typed Copy of Document Transferring Matacong from the Chiefs of the Bullam Country to William Gabbidon*, 1842, MIP 199a.

(30) *Agreement between Allimamie Amura and S. Gabbidon & W. H. Savage for the Island of Matacong,* 30 December, 1825, MIP 197c.

(31) *Agreement between Allimamie Amura and S. Gabbidon & W. H. Savage for the Island of Matacong,* MIP 197c.

(32) *Ibid.*

(33) Fyfe, *A History of Sierra Leone*, p. 159; Foray, *Historical Dictionary of Sierra Leone*, p. 77. ただし、ガッビドンとサヴェイジの影響あるいは紹介によって、1826年にシエラレオネ政府が現地諸首長と条約を結び、マタコン島の主権を獲得したということを示す史料もみられる（*Copy of Part of Despatch from Administrator-in-Chief, Sierra Leone, to Colonial Office*, 19 November, 1891, MIP 108）。

(34) E. Hertslet, *The Map of Africa by Treaty*, 1895 (new impression of the third edition, London: Frank Cass, 1967), pp. 34–35.

(35) 転貸とは、賃借人がその地位を保ちながら第三者に賃借物の使用収益をさせること、い

わゆる又貸しのこと。

(36) 永原陽子「カシキリ島は誰のものか――植民地分割と現代のアフリカ国家」、比較史・比較歴史教育研究会編『帝国主義の時代と現在――東アジアの対話』、未来社、2002年、43－55ページ。

(37) *Facts Regarding Lease of the Island of Matacong, West Coast of Africa,* MIP 230.

(38) Fyfe, *A History of Sierra Leone*, p. 409; John D. Hargreaves, "The French Occupation of the Mellacourie, 1865–67," *Sierra Leone Studies*, 1957, p. 4.

(39) Fyfe, *A History of Sierra Leone*, p. 211.

(40) スティーブン・ガッビドンの死亡年を1838年とする史料もある（*Copy of Part of Despatch from the Administrator-in-Chief*, Sierra Leone, 19 November 1891, MIP 108）。

(41) *Typed Copy of Document Transferring Matacong from the Chiefs of the Bullam Country to William Gabbidon,* 1842, MIP 199a. その際の賃料も、やはり100鉄棒（5ポンド）相当の品物とされた。

(42) *Release and Bargain Sale of the Island of Matacong*, 24 August, 1844, MIP 200b.

(43) Fyfe, *A History of Sierra Leone*, p. 240; Gustav H.K. Deveneaux, "Sierra Leone and South Africa," *Africa*, Vol. 57, No. 4, 1987, pp. 572–575. ナタール時代のアイザックスの活動については、以下の文献が詳しい（Brian Roberts, *The Zulu Kings,* London: Hamish Hamilton, 1974）。

(44) "Matacong, West Coast of Africa," *The Illustrated London News*, 2 December, 1854, pp. 551–552.

(45) *Ibid.*, p. 552.

(46) *Autograph Description of Matacong*, n.d., MIP 178.

(47) Fyfe, *A History of Sierra Leone*, p. 275.

(48) *Declaration of Mr Peter Manning*, 16 April, 1883, MIP 208.